

専属医師『阿良 鋹』

(` 鋼 `)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて紐育と呼ばれた街ヘルサレムズ・ロットにて、一人のマッドドクターがやって来る。

※要は回復役オリキャラ入れただけ。

3	2	1
12	6	1

目次

かつて、^{ニューヨーク}紐育と呼ばれた街は一晩のうちに消失した——大崩落と呼ばれる現象から、バラバラに落ちた積み木を新たな形へと成すように、「ヘルサレムズ・ロット」と呼ばれる都市が構築された。未だ人智の及ばぬその場所は、今後千年の覇権を握る場所とも例えられ、様々な思惑を持つ者達が跳梁跋扈する街となった。

そんな混沌とした世界の均衡を保つために暗躍する組織が存在している、その名も「秘密結社・ライブラ」。とある事情により神々の義眼と呼ばれる異能を持った少年『レオナルド・ウオッチ』がライブラ構成員と出逢い、そこから物語が始まっていくことになった。

この世界は何でも起こりうる。ヘルサレムズ・ロットの外側の非常識が、ここでも起こりうる。日常と非日常が逆転しているのだ。毎日のように喧騒としているこの街で、向こう側の常識はもはや通じないのだと思え。誰もが口を揃えてこう言うだろう。

そして、外側からヘルサレムズ・ロットへと赴く場合、大抵は行かぬ方が良いものであると誰もが口を揃える。だからこそ、この街へと向かう者は誰もが「どうなっても知らない」と口には出さぬがそう思う。今回もまた一人、白衣の男がその街へと向かうことが決定していた。

しかし、外側の住人の誤算は彼が普通ではないという点を知らない。そのため無謀であると捉えたが、彼からしてみれば無謀という言葉はナンセンスだと言うだろう。プライベートジェットの中で、一人つまらなさそうに束ねられた用紙を一枚ずつ確認し全てを読み終えると、空いている別の席に放り投げた。綺麗にその席に置かれるとアタッシュケースから特殊な注射器と赤い液体の入った試験管を取り出す。

中身の入った試験管をその注射器に装填し、彼は自身の首に針を刺して液体を注入していく。体内へと入っていく間、彼の瞳は元の青眼から赤く変色していき、注入し終わると元の色へと戻った。丁寧に、上機嫌に、注射器と試験管を取り外しアタッシュケースへとしまう

と、窓から見えるヘルサレムズ・ロットと外を隔てる霧を視界に入れた。

機嫌よく鼻歌交じりに携帯を取りだすと、彼は電話をかけた。

「久しぶり、元気してたあ?」

その声はどことなく蠱惑的であった。



ヘルサレムズ・ロットは喧騒の日々である。ただボンヤリと過ごしているだけで必ず何かに巻き込まれるというのは普通である。この日もレオナルド・ウオッチ、『レオ』は巻き込まれていた。具体的には職場の先輩にあたるザップ・レンフロによって、金をせびられ陰毛頭と罵られながら拘束されていた。

レオが成り行きとはいえ加入したことで以前より騒がしくなったライブラでは、もはやこれが何時ものことに思えてきていた今日この頃。そんな日常を崩すかのように一本の電話が掛かってきた。ステイブン・A・スターフェイズの電話からその音は鳴っていて、画面の発信先を見た途端全身が固まった。

鳴り続ける着信音、固まるステイブ^上ン。それを見て疑問に思わない者が居るだろうか、いやいない。

「あの、ステイブンさん。電話でないんですか?」

「……あ、ああ。少し席を外してくる」

明らかに動揺の色が隠しきれないステイブンは部屋を出ると電話に出たようで、普段の上司の様子からは見慣れない状況を知りや否や、ザップに聞いてみた。

「何か、いつものステイブンさんらしく無かったですね」
「番頭のある見え透いた動揺見るの初めてなんだが」

ザップもステイブンの動揺に疑問を持ったらしく、誰から電話が掛かってきたのか気にはなって、二人揃ってコソコソと入口の扉へと聞き耳を立てる。が、勢いよく開けられた扉にぶつかり二人仲良くカーペットに伏せる結果となった。

扉を開けたステイブンはかなり慌てた様子で声を張り上げた。

「ヤバい、『ハバキ』の奴がこつちに向かって来ている！」

「!？」

「ッ、ハバキい!？」

クラウドス・V・ラインヘルツとザップの二名は、その『ハバキ』という人物の名を聞いた途端に過剰なまでに反応する。特にザップに至っては聞いてからコンマ数秒もせずにライブラから逃げおおせる始末。

しかし『ハバキ』という名を聞いたことの無いレオにとっては、なぜそこまで慌てるのか分からなかった。クラウドスとステイブンの二人が慌てるまでの誰か、という点からすればレオも何となしには分かるのだが、実感がわからないのは仕方ないといえれば仕方ない。

「あの、『ハバキ』さん？ って、誰ですか」

「『阿良 鋤』^{ハバキ}このライブラの専属医師だ、レオナルド君」

「専属医師？ 居たんですか……でも医者なら特には」

「ただの医者ならどれほど良かったか……」

奴はマッドの気があるんだ、目の前で自分自身の切開シーンを見せつけられることもあったんだ。ザップも被害者の一人だね」

その説明を聞いてハバキという人物の印象が、眼鏡をかけた悪い笑みを浮かべる高齢の爺さん”に固定された。

「極めつけに、君の神々の義眼の系譜にあたる【神々の義腕】保持者でもある」

「ちよ、本当なんですかそれ!？」

神々の義腕を知らないレオでも、自身の持つ神々の義眼の系譜と言われれば理解せざるを得ない。この神々の義眼は過去現在未来を読み解くことが出来、見えない存在、見えるはずのない存在をも見ることが出来る。ただし、他人の視力を奪うことで神々の義眼は成り立つ。

【神々の義腕】——自身の本来持つ両腕の機能を明け渡すことで、利き手側に発生する腕。この腕を手にした者は”明確な目的”を持った使用行為をすることで最適解に自動で動く代物。正確無比な一連の動きは、生き物であれば血を一滴も流さずに切断できる。

ここまでの情報から、先の偏見に隻腕の人物であると追加された。しかしこれらはいくまでもレオの偏見からなる人物像であるため、正しいものとは限らない。

「いやそんな事は兎も角、レオ君。安全が確認できるまで君は外出、アイツの目の前で神々の義眼を見せたら何をしでかすか分からん!あと空港には近付かないこと!」

「わ、分かりました!」



暫くして、噂の本人はヘルサレムズ・ロットに降り立った。空港内で人目を気にせず、機嫌よくステップを踏んだりその場で一回転したり、都会に初めて来た田舎者がウキウキしている様子が見られた。彼の場合は戻ってきたというのが正しいのだが。

迎えるの一つも寄越さないのは彼の要望で、本来はリムジンにでも乗り込み勤務先へと真っ先に移動する立場であるのだが、彼にとってそれは些細なことに留まる。気にかける程のものではなく優先順位は下から数えた方が早い。

白衣の下に着た、手までも隠した両腕の黒のアームカバーが人の目に入るが気にした様子はない。こんなのも居るだろうと感覚が麻痺しているというのもあれば、そもそも当人に興味が無いというのもある。

スキップしながら、人混みをすり抜けるように向かうのは楽しかった日々のあった昔の職場。飽きることの無かった喧騒と悦楽の日々が思い起こされていき、到着した彼は勢いよく扉を開けた。

「ただいまー！」

扉を開けば、そこは知り合いが何事もなく出迎えてくれる……ことはなく、ライブラには誰一人として居なかった。返事が無かったことで拍子抜けしたハバキは室内を彷徨く。ここに来るまで懐かしさを感じる代わり映えのない内装を、若干沈んだ気分のままトボトボというオノマトペが似合う足運びで巡る。

扉から一直線、クラウスの使用する机まで向かうと予想していたかのように手紙が置かれていた。達筆な字で「Nach Habaki」の一文から始まる内容には、「緊急でBlood Breed^{血界族}の討伐任務が入ったため大した持て成しも出来ずに申し訳ない。用事が無ければ、何も無いが寛いでくれて構わない」とあった。

「相変わらず律儀だなあ。だからポイント高いんだけどさ」

機嫌が良くなったらしい。白衣のポケットからボールペンを取り出し、余白部分に返事を書き終わるとライブラから出ていく。ある程度の距離までライブラから離れるとタクシーをつかまえて、HL中央病院まで向かう。知る人から散々マッドドクターなどと呼ばれていたが、これでも医者である。それなりに有名だと本人はそう認識しているが、神々の義腕を持つ時点でその認識には齟齬があると考えるべきだ。

明確な意図のある目的を持った行動ならば、例えどのような事であろうと自動的に完遂してくれるこの義腕は、言葉通りの神の手を持つことを許された証なのだ。この義腕を手にする前も彼は他とは一線を画した腕前であったが、これを手に入れたことで更なる高みへと至ることが出来た。義腕を与えた神直々に医術の神髄を教え受けた、神々の寵愛を受けた者。

阿良 鋤とは、そのような人物なのだ。医療界で名を知らぬ者は居ない頂点である筈なのに、本人はそんな名誉や地位に手を付けない。勝手に周りが評価するために、勝手に名誉や地位、金なども入る。面

倒に思い、有り余る金の使い道が駄菓子の大人買いという子どものような思考をしている。

白衣の内ポケットからグレープ味の風船ガムの箱を取り出し、中身を全部口に含ませ暇そうに車内で膨らませる。まだ勤務先まで時間はある、距離もあるので只管に外の景色を見てはポーツとしてガムを膨らませていた。一回だけ加減を間違えて破裂し、左頬を覆うほどに広がったガムを取り払い何事も無かったかのように口へと戻した。



中央病院に到着し院長と挨拶を済ませ、勤務日と勤務時間の相互確認を終えると食堂へと赴いて異界産マックスコーヒー、「ドゲロコーヒー」を一口飲んで顔をしかめるが続けて飲む。翼を授けるあれや和訳モンスターのあれみたく食品添加物の多さが見受けられ、それらによって甘さが体感五倍（マックスコーヒーの三倍との情報）にまで上昇されている。

ハッキリ言ってこれを丸々一缶飲めば糖尿病は確実にあるにも関わらず、医者である鰯が飲んで良いのか疑問に思われる。幾ら甘党だからとはいえここまで行けば度が過ぎていることは承知なのだが。人目も気にせずゲップして、未だに顔面崩壊しながら外の空気を吸うために出ようとした。

救急車輛が警笛を鳴らしながら近付くのが見えた。まるで他人事みたいな反応をする彼であったが、ドゲロコーヒーを飲んだ影響で吐き気を催しており即座にトイレへと向かい吐き出していく。気持ち悪さ全開でトイレから出ると一人のナースが彼の元へと来た。

「ハバキ先生！」

「なに…… 用事ならちよつと待って、水飲みたい……」

「誠に勝手ながら、先生に治療して欲しいとある方が」

「誰さ」

「クラウスさんという方からで——」

目の色が変わった。目頭を抑えてドゲロコーヒーを看護師に渡すと白衣から懐中時計を取り出して時間を確認、自身の頬を叩いて医者としての顔を露わにした。

「手術室はどこ」

「一階の東館奥です」

「患者の名前は」

「ステイブン・A・スターフェイズさんです」

「容態は」

「右肘から鋭利な何かで切断されています……でも、先生が居るなら腕を戻してほしいと」

「あの馬鹿—— 10ml注射器一本とアルコールウエットティッシュ用意して。縫い合用の糸と針と包帯も、残ってる腕にだけ麻酔かけてくれ、後はやる」

「せ、先生。幾ら何でも」

「ほら時間が無いからさっさと行く！ 他の看護師に伝えて至急用意！ 腕の一本や二本元通りどころか性能が上がる位に治せる奴がそう言ってるの！ 時間を潰すな！」

「は、はいー」

急ぎ看護師が走り去り彼は手術室へと威厳ある雰囲気に向かって。手術準備室に入り白衣を脱ぎ捨て手術用の薄緑の衣服へと着替える。医者として立ち会う以上、患部への接触を最大限避けなければならぬが、別の箇所から細菌の侵入もあってはならないと手を洗い消毒液を付けたあとゴム手袋とマスクを装着。

全て終えた時に合わせたかのように看護師が頼んだ物を用意してくれた。それらを受け取り手術室へと入って少々、手術室の扉が開かれステイブンと切り取られた腕が入室した。

「ツ……ああ、ハバキ」

「口を閉じるバ患者、さっさと治したいならな」

「そう、させて……もらうよ……」

切り取られた腕を受け取ると切断面に合わせるように並ばせ、用意された注射器を自分の首に刺し血を取り出した。針の部分を拭き取ると、右腕のみの部分麻酔が施される。止血用の包帯を解いて断面を確認し、ピッタリと合わせると残った腕に先に取り出した自分の血を注入する。

後は素早く切断面を合わせて即座に縫い合、ものの三十秒で終わらせる。縫い合箇所には包帯を巻いて一つ息を吐いた。マスクを下げて使用器具をパレットに置くと、ステイブンの眼前で嫌味たらしく言った。

「終わったぞ、三日は経過観察で入院な」

「分かりました……」



今回の Blood Breed 戦は、吸血鬼との戦いとしては異端であった。決して自らの力を驕らず、策略を駆使した相手であった。策にはまったことで結果的にステイブンの右腕を代償とした相打ちとなったが、それは御の字であっただろう。下手に戦闘を続けていけば間に合わなかったやもしれない。

クラウスの隣でレオが心配そうにしていたが、当のクラウスは安心したかのように息をついた。ただ、自分ではどうしようも無いことに不安感を覚えるのが人間というもので、分かってはいるものの話しかけてしまうのは致し方ない。

「あの、ステイブンさん大丈夫なんでしょうか。幾らハバキさんつて方が居ても、腕はどうしようも……」

「いや、その心配は要らない。ハバキの腕は確かなものだ」「でも……」

想定よりも遥かに早く、そして何事も無かったかのようにステイブンに乗せた台車が呆気に取られた医療スタッフに運ばれて行った。そんな光景に二度見三度見としたレオの心境はこの街の洗礼を受けていたとしても「有り得ない」と思っているだろう。

最後尾に手術衣を着た男がマスクと帽子を取りクラウドの元へと歩み、呆れたような表情のまま話しかけた。

「クラウドス、今回は偶々居たから良かったものの。本格的に勤務するの来週なんだよ」

「すまない、だが助かった」

「僕が居るから少しは大丈夫だと思ってたのかな、ん？」

「本当に申し訳ない、反省している」

「なら良いさ……ん？」

レオはこの二人のやり取りを見ていた。レオとしては、如何にもアジア系の鼻高なこの人物が『ハバキ』という人物なのかと思っていたが、自分の考えていた人物像と色々違いすぎていたため少しフリーズしている。

二人の目が合うと観察するようにレオを見たハバキは、再度クラウドに話しかけた。

「クラウドス、この子は？」

「ああ、最近新しく入ったレオナルド君だ。レオナルド君、この男が『阿良 鋹』だ」

「あ、はい。レオナルド・ウオッチです」

「丁寧にも、阿良 鋤です。名前から分かるかみだけど日本人
さ——つと、それより色々と話聞かせてもらおうよ。何があったの
かさ」

J a p a n e s e

手術衣を脱ぎ元の白衣へと着替えるとステイブンが搬送された病室まで向かう。クラウスとレオの二人は先に向かっていたため、病室に入った時は三人が真剣味を帯びた雰囲気話合っている。ハバキが入室すると三人とも彼の方へと視線を移し、くぁ と欠伸した顔をしたハバキを見て緊張感が解れた。

ステイブンの腕に関して、いつも通りに治療したのであと二時間もすれば接合部に痛みが生じるものの、二十四時間後には完治すること。ただしウツカリ腕ポロリしてもらっては元も子もないので三日ほど経過観察の後復帰という形を取っていただく。

件のBlood Breed戦についての情報をあらかた伝えると、興味無さげな様子を崩さないままパイプ椅子の背もたれに寄りかかり、また欠伸をする。三人からハバキの口の中が見えるぐらいの大ききさであった。中々失礼だなとレオはそう感じていたが二人は溜め息をつくだけ。

「……脳筋プレイ至上主義みたいな蝙蝠が頭使って相打ち、頭使わない方がよっぽど勝てる見込みあんのに」

「何っー頭してるんですかこの人」

「ハバキは大体こうさ。色々、ワケあって」

「んでー？ ステイブン、ターゲットがどこ行つたか分かるの」

「その点なら心配ない。奴の狩場は市警の情報からある程度割り出してる、もつとも情報が全て外れる可能性も無くはないがね」

「相手の損害は」

「少なくとも完全修復に時間を掛けさせるまでには、だ」

「んなら情報の狩場のどつかだな。下手に消耗しようものならと考える奴っばいし」

「よっこいしや」と掛け声を出して立ち上がり背筋を伸ばす。そこでふと気にかかったことを言ってみた。

「そいや、忌み名が分かんなきや無理なんだよな。挑んだのは……そのレオナルド君が真名看破系の能力者かなんか？」

「——本当はお前に言いたく無かったが、今回ばかりは負けたよ。何でそんなに勘が鋭いのやら……彼は神々の義眼保有者で」

「うっそマジでえ!？」

個室内で走るのは如何なものかと、ハバキはレオに向かうのだがクラウスに両腕を片腕で拘束されて接近は無意味に終わった。ジタバタするがクラウスはビクともしない、段々ハバキが疲れてき始めた。しかし目の前に極上の被^エ検^サ体があるのに届かない、後もうちよつとなのに……と微妙に腕を振動させながら手を伸ばそうと試みるが無意味に終わった。

「く、クラウス…… これ、解いて……」

「駄目だ。ハバキ、君の特殊な欲求からレオナルド君を守らなくてはならないのだから」

「そんなあ! ちよつと! ちよつとだけ義眼取って検査するだけだからあー!」

「絶対に嫌です」

「おねがぁい本当にちよつとで良いからあ! なら眼細胞組織の採取だけで良いからあー!」

「……、病院」

「騒がしいですよ! 他の患者の迷惑です!」



夜のヘルサレムズ・ロットは眠らないために、更なる危険が増える。常日頃騒がしい街であるにも関わらず、元ニューヨークであるために

喧騒はより一層増す。異界人も地球人も、勿論夜といえはの奴等の活動も活発になる。いや、奴等は昼も夜も関係ないのだが、基本夜に活動するものという認知が広まっているためそう伝えられるのだが。

しかし夜が隠れやすいのは事実。闇に乗じる、という言葉があるように何かに悟られず気づかれず、そのように動くためには夜が一番最適であるから。そんな言葉が横行しているため、あまり夜に出歩かない方が良く人は言うのだ。しかしそんな忠告をこの眠らない街は守りはしない。

ある廃墟ビル内で徘徊する屍喰^{グール}い、呻き声が僅かな数ではあるものの発せられ空気を伝って、ある程度の距離からであれば微妙に聞こえる程度の。亡者は生者の気を感じ取って幽鬼が如くそれに執着し続ける、死した者が生きている矛盾を正すように彼に集まっていた屍喰いはドロドロに融解した。

一室のドアの前に立ち、数瞬。いつの間にかドアは壁ごと何かに切断されておりバラバラと崩れ落ちる。ライトもつけずにその部屋へと入っていく彼は、部屋の真ん中に来たあたりで自身の身に迫り来る先の瓦礫を切断し、危なげなくその場に立っていた。

「自称人間よりも高等種族な癖して、第一手がこれとは……ブラッドブリードらしくないなあ。へーいピッチャービビってるう〜」

「巫山戯た輩が来たと思ったが、貴様【牙狩り】か？」

「牙狩りの知り合いなら居るけど、俺は医者。あらあらヤダヤダ、こーんなところに恐ろしい化け物が。知り合いに連絡しなきゃ」

「貴様は惚けるな。先のグールの始末と牽制に対する反応速度、ただの医者では無い。やはり——」

「普通じゃないのは自覚してんのよねえ。でも牙狩りじゃないさ、と
いうかお前^{Blood Breed}らに興味無いし」

「……………何者だ、貴様」

「確かめてみる？」

彼、阿良 鋤は白衣の袖からメスを取り出し投げ付ける。速度は申

し分なく、ヘルサレムズ・ロットの住人は避けられないだろう。だが結局はその程度、難なく避けたあとはまた瓦礫を投げ付ける。当然の如くそれらは切り裂かれハバキのダメージにはなっていない。全くその場から動いてもいない。

間髪入れずに瓦礫を投げ続ける。それをハバキは切り裂き続ける。傍から見れば防戦一方のハバキと有利な状況に持ち込めたBlood Breedという形に見えるが、ハバキは疲れた様子すら見せていない。時間が経てば経つほど、状況は変わっていく。

遂には投げる瓦礫も無くなり、また睨み合う。下手に攻撃を仕掛けるとは不味いと何かが訴えているのだが、このまま相対してはギリ貧であるから仕掛ける必要があると頭では考えている。ハバキは暇であることを見せつける、欠伸という形で。

「まだかかる？ 眠いんだけど」

「……………では寝れば良いだろう」

「ん、それもそうだ。じゃあお休み」

「なっ——」

何ということでしょう、ハバキはその場で横になって眠ったではありませんか。呼吸をゆつくりと安定した状態にまでさせると、完全に熟睡しているではありませんか。これには流石のBlood Breedもハバキが何をしているのか理解不能に陥りました。

しかし隙だらけ、そう無防備なのである。どうぞ狙って下さいと謂わんばかりに格好の的なのである。ここでチンピラ風情が隙だらけだと知れば、財布をスられるかヤバイ目に遭わされるか。だが先程まで対していた存在はその発想には至らなかつた。

わざわざ格好の餌となつた、これだけでまず何か策があるのだろうかと疑う。だが完全に治りきつてはいるものの、人間を殺し尽くすまでの前菜として喰らうべきだと本能が告げる。危険はないが、危険であると感知している。疑り深さに関してはまるで人間みたいだと誰もがその場に立ち合えばそう思わざるを得ない。

喰らうか、喰らわず逃げるか。前者は何事もなければ餌であったと分かり、牙狩りを知っているため情報を断つという意味合いで安心は出来る。後者は罾である可能性を否定出来ないがため、ここで逃げれば時間稼ぎにはなる。本能か、理性かを選ばなければならないのだ。

瓦礫は手元に無い。ならばハバキから距離を取りつつ起こさぬように回り込んで投げれば良い。先よりも軽くなつて投擲力を上げなければ殺せる威力とはならない。ゆつくりと回り込もうとするが、ふと甘美で芳醇な匂いがハバキからしている。

その臭いが本能を揺り動かし、飢えを与えた。上質どころか最高級の酒造品が急に現れたのだ、何故ハバキからそのような恐ろしくも溺れることに躊躇いを持たせないような、そしてそれが罾であると知っていて尚渴きが抑えられない。

ゆつくり、ゆつくりと眠っているであろうハバキの方へと近付く。ここまで近付けば、最早耐えることは出来なかった。眠っているハバキの首元へと口を近付け、血が出るまで噛んだ。